

10. 試験研究

森の機能を活かした溪流漁場の利用と改善のための技術開発試験費

1) ルアー・フライフィッシング専用区の設定試験

森田 尚

【目的】

遊漁振興による河川漁業活性化の一方策として、近年若者層を中心に人気の高いフライフィッシングやルアーフィッシングを対象とする専用区を設定することによる、集客状況と放流魚の釣獲状況を把握する。それと同時に遊漁者の意見を把握する。

【方法】

4～6月に県内6河川漁協（土山、姉川上流、高時川、葛川、愛知川上流、草野川）の漁業権漁場内において、ルアー・フライフィッシングの専用区を試験的に設定し、アマゴの放流を行った。各漁協の協力により、漁場監視の際に専用区内にいる遊漁者に対してアンケート調査票を手渡した。アンケート調査票は、あらかじめ料金受取人払いの返信用封筒に入れておき、釣終了後に遊漁者から返送されたものを集計した。質問項目は、釣りをした日付、住居地（県市町村）、年齢、性別、釣法、遊漁券の種別、釣時間、釣果、釣った魚の処理法、釣りたい尾数、釣りたい魚のサイズ、釣りたい魚種および自由記述意見とした。

【結果および考察】

- ①アンケートの回収数は土山55通、姉川上流49通、葛川24通、愛知川上流13通、高時川8通、草野川5通の計154通であった。
- ②住居地は県内が38%で最も多く、次いで京都府19%、大阪府14%、愛知県9%、三重県8%の順で、その他岐阜県、兵庫県、奈良県からも各1%の割合で認められた。土山では県内、京都府に次いで三重県からの遊漁者が多く、葛川では県内が少なく、京都府からの遊漁客が半数以上を占める等の特色が見られた。
- ③年齢層は土山と葛川で30代がそれぞれ56%と46%を占めて最も多く、次いで40代が多い傾向を示したのに対し、姉川上流と愛知川上流では40代がそれぞれ30%と54%を占めて最も多かった。
- ④釣法は土山と葛川でフライがそれぞれ67%、86%を占めて最も多く、姉川上流と愛知川上流ではルアーがそれぞれ63%、54%を占めて最も多かった。
- ⑤土山、姉川上流、葛川、愛知川上流では約40%が日券購入者であった。
- ⑥土山のフライ釣り遊漁者は一日に釣りたい尾数が5ないし10尾という回答が多かったが、実際に釣れた尾数は0～3尾の人が多く、平均3.0尾/人、最大20尾であった。
- ⑦姉川上流のルアー釣り遊漁者は一日に釣りたい尾数が10尾以上の人が多かったが、実際に釣れた尾数は3尾の人が最も多く、平均10.8尾/人、最大38尾であった。
- ⑧土山と葛川では釣った魚を全て放流する人が60～80%であったが、姉川上流と愛知川上流では全て持ち帰る人が70%近くであった。
- ⑨遊漁者の要望として、「キャッチアンドリリース区にしてほしい」、「餌釣りの人が専用区に入らないようにしてほしい」、「天然魚に近いきれいな魚を釣りたい」等の意見が多く寄せられた。

表1. ルアー・フライ専用区試験設定区間の距離と面積、放流密度

	距離 (m)	川幅 (m)	面積(m ²)	放流 回数	総放流 量(kg)	1回目放 流量(kg)	1回目放 流量(尾)	放流密度 (g/m ²)	放流密度 (尾/100m ²)
土山	1,000	20	20,000	8	600	100	435	5.0	2.2
姉川上流	1,500	40	60,000	3	800	300	1,300	5.0	2.2
高時川	300	60	18,000	1	100	100	1,230	5.6	6.8
葛川	300	100	30,000	3	600	200	2,460	6.7	8.2
愛知川上流	2,500	40	100,000	1	500	500	6,100	5.0	6.1
草野川	5,000	40	200,000	1	900	900	11,500	4.5	5.8

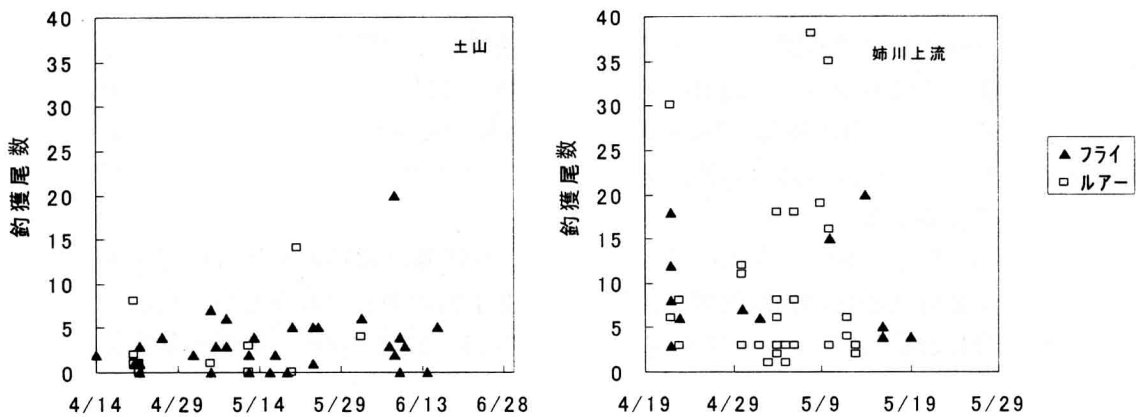


図1. 土山と姉川上流における釣獲状況

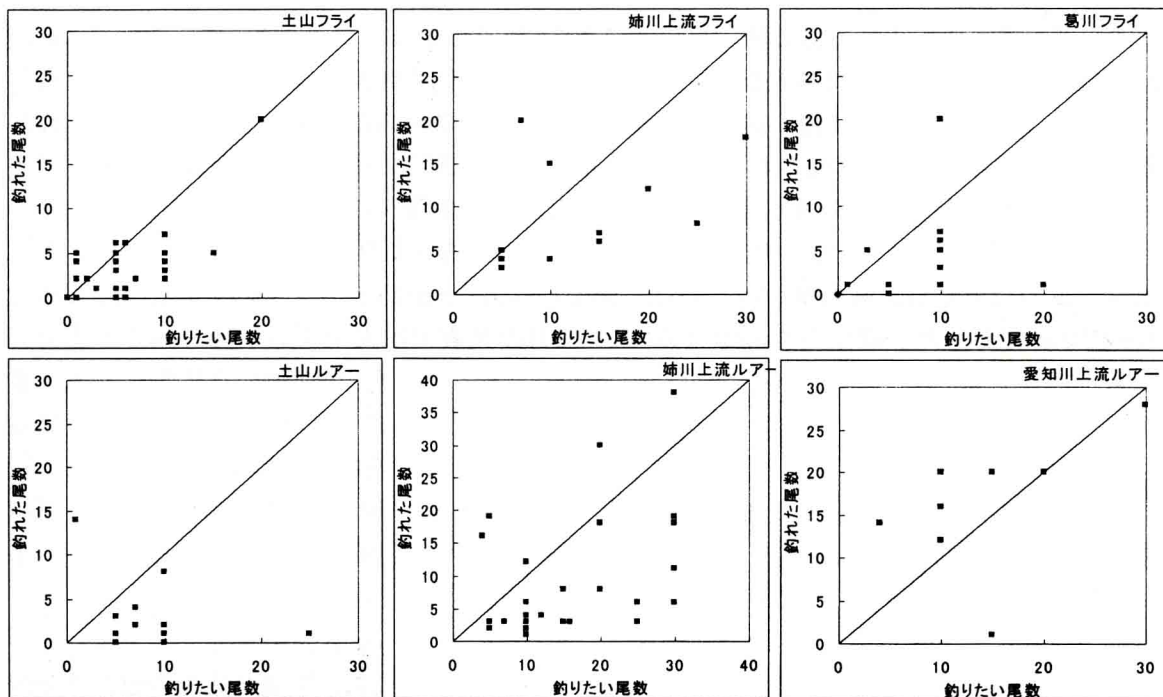


図2. 遊漁者が一日に釣りたい尾数と実際に釣れた尾数との対比